

晋 州 記

—韓国中等1級正教師資格（日本語）研修会に派遣されて—

深 見 兼 孝

6月半ばだったか、国際交流基金の小林氏から筆者の研究室へ、この夏韓国の慶尚大学で高校の日本語の先生の研修会があるので、そこへ行って授業をしてくれないかという電話があった。もし、都合が悪ければ他の人を推薦しろと言う。……とっさに思い浮かばない。引き受けることにした。実は筆者はこれが初めてではなく、昨年も行っている。その時は茨城大学の金本女史の推薦もありなんとなく興味が湧いたからだ。筆者に白羽の矢が立ったのは昨年行っているからに違いない。派遣人数で韓国教育部とやり取りがあった（当初6名の予定だった）が、結局今年の研修会に派遣されるのは、筆者の他に神田外国語大学の成澤氏（リーダー）、国立国語研究所の生越氏、国際交流基金日本語国際センターの三原氏の4名ということになった。後で分かったことだが、派遣人数については、教育部から研修開催校である慶尚大学へ何の連絡もなかったそうである。慶尚大学側は6名でも構わない、むしろ歓迎であったのにとのことだった。

打ち合せのため出国までに数回東京に行った。

7月24日(金)大阪空港。東京からの荷物（機材や携行教材）を受け取り飛行機に乗せなければならない（と、思っていた）ので、JALのカウンターへ行きその旨を話すと、しばらく待たされて、荷物は届いてないが来たら必ず積むとのこと、これでいいのだろうかと思いつつ出国ロビーへ。やがて羽田からの3氏と合流。荷物は大阪で降ろさず直接金海空港へ行くらしい。一抹の不安を抱きつつ出発。下午金海空港へ到着。荷物も無事到着。日本領事館の多田、中村、朴氏らの出迎えを受ける。その日は領事館で打ち合せをした後、総領事を訪問し、釜山で一泊した。釜山駅のすぐ横にあるホテルである。

7月25日(土)研修の開催校である慶尚大学がある晋州市へ移動。ホテルにチェックインした後、慶尚大学へ。日本語教育科（以下単に「科」と呼ぶ）の先生がたやアルバイトの学生と会う。慶尚大学は日本語教育科を持つ韓国唯一の国立大学だ。そのせいであろう、中等1級教師資格（日本語）研修会はここ3年連続してここで行われている。これからもここで行われるだろう、とは科の先生がたの推測である。安主任、梁研修院長をはじめとする科の先生がたとの打ち合せの後、晋州市の南方にある三千浦で歓迎の宴に臨む。研修院は科とは別の組織で、高校教員の研修全般を担当している部局であるが、梁先生は院長を兼任しておられるのだ。

晋州市は釜山から西へ車で2時半弱のところにある。この一帯は1592年と1593年の2度に渡って、侵攻してきた日本軍と迎え打つ朝鮮軍の間に激戦が繰り広げられた地域だ。1592年の戦闘では朝鮮側が勝利したものの、1593年の戦闘では日本軍の前に晋州城が陥落、敗北してしまった。この時、晋州城内の矗石楼で勝利の宴会を開いていた日本軍の将校（？—晋州城内にある石碑や説明文では「倭将」とあるだけで、身分や名前が分からない。ぜひ知りたいものだが。）を論介という妓生がおびき出し、彼を抱いたまま晋州城下を流れる南江に入水したというのは有名な話である。これにより彼女は「義妓」とされ、矗石楼のすぐ近くに彼女を祭った祠「義妓祠」がある。この他にも晋州城内には朝鮮軍民の忠烈を称える碑や、慰霊の碑などがあり、このような歴史があるところで日本語を教えるのも悪くない。

7月26日(日)安主任一家から昼食の招待を受ける。市内で納豆汁定食をごちそうになる。美味。お返しに伝統茶屋でお茶をごちそうする。

7月27日(月)は研修生を集めてオリエンテーション。最初に我々4人の自己紹介や授業についての説明を行い、その後各クラスに分かれて実力診断をかねて研修生の自己紹介を行った。「中等1級正教師資格研修」というのは、高校の先生の管理職への登龍門ということだ。どの様な手続きで「中等1級正教師」の資格がもらえるのか知らないが（成績を出すことになっているので合格不合格があるのだろう）、この研修を修了したことが認定されないと、教頭・校長にはなれないらしい。我々が担当するのは研修の全日数の半分よりやや手前からである。時間数では全時間数の4分の1程度である。研修生は5、6年の勤務経験のある教師、年齢から言うと男性が30代前半、女性が20代後半が一番多いが、年齢のばらつきは少なくない。中には60代のご老体もいた。授業は午前9時から午後5時50分までであるのでさぞや大変であろう。

授業の準備—時間割、分担、授業内容、教材選定（作成）等は、生越氏が総括となり渡韓前にしておいた。クラス分けも事前に慶尚大学に4クラス（A-1、A-2、B-1、B-2）に分けることを依頼しておいた。研修生は全部で140名なので、1クラス35名となる。担当科目は「日本語会話実習・作文」だったが、毎時間作文の指導は不可能なので、昨年にならい「会話作文」ではビデオによる聴解訓練と日本事情の理解に重点をおき、授業のあらましを次のようにした（カッコは所要時間：分）：

発音（20）→ 会話実習（100）→ 会話作文（100）

または

会話作文（100）→ 会話実習（100）

授業担当者はA-1、A-2が筆者（会話実習）と成澤氏（会話作文）、B-1、B-2が生越氏（会話実習）と三原氏（会話作文）で、成澤氏がA-1で「発音」と「会話作文」、

その後A-2で「会話作文」をやるとすれば、筆者がA-2で「発音」と「会話実習」から始め、その後でA-1で「会話実習」をやるといった具合である。Bの二クラスもこれと同様にした。なお、8月4日からはA-1、B-1が「発音」と「会話実習」から始まるようにした。

「発音」は自主教材を使い、「単音編」と「リズム・イントネーション編」に分け、前者を筆者が、後者を三原氏が作成した。「会話実習」の主教材は『日本語でビジネス会話初級編』（日米会話学院1989）と『24 Tasks for Basic Modern Japanese Vol. 1, 2』（ジャパントアタイムス1989）で、副教材も含め細部はそれぞれの担当者に任すことにして、筆者がおおまかなシラバスを考えた。「会話作文」の主教材は『ヤンさんと日本の人々正・続編』（国際交流基金）で、進め方は成澤氏と三原氏が相談の上決定した。なお副教材（文型と語彙表）は三原氏が作成した。

このような授業が全部で10回である。ただ、これだけでは不足なので「会話特別」という授業を設け映画を2本見せた（1回1本ずつ）。一つは『幸せの黄色いハンカチ』、もう一つは『となりのトトロ』である。また、各クラスでスピーチを行い、試験の点数に加算して成績を出した。

7月28日(火)より本格的に授業開始。「発音・単音編」は韓国人が苦手な音を弁別・発音できることを目的にしたものであるが、リズム・イントネーションの方が重要であろうというので、最初の4回で「単音編」を後の6回で「リズム・イントネーション編」をやる計画だった。しかし、いずれも分量がやや多すぎて筆者は「単音編」を1日オーバーし、「リズム・イントネーション編」の最後の「プロミネンス」は説明だけで終わってしまった。他の3氏も似たりよったりだったらしい。より多くの時間を当てると同時に内容の思い切った整理も必要だろう。

「会話実習」は所用の目的を達成するための日本語の運用能力を育成することが目的であった。したがって、授業はタスクを中心としたもので、ロールプレイを多く取り入れた。が、1クラス35名という大人数のため個人個人に対し細かい指導ができなかった。研修生は滞日経験のある者（これは少数である）から生身の日本人を見たことがない者まで様々である。そのせいか彼らの頭の中では互いの日本語能力（特に口頭表現）の差は実際より拡大され、不必要な劣等感を感じたり、また、我々が採用したような授業の形式に慣れていなかったり—学生時代にそのような方法で教えられたこともなければ、教育の現場で実行してみたこともないのがほとんどである（総合高校では「受験のための日本語」が専らという）—、はたまた20日程度の授業から成果を得ることに余り期待をしていなかったりで、その意味を理解できずに、最後まで消極的な姿勢を崩さなかった研修生もいた。

正直に言えば、研修生に対し行ったアンケートの回答は筆者の目では「会話実習」に積極的な評価を与えたものは少なかった。テキストを一冊上げるといったやり方ではなく、様々

な教材を使った（シラバスもニーズ分析から決定されたものではない）ため、統一性・体系的性に欠けると感じた研修生もいた。今後の課題である。

なお、この日前日に壊れたパソコン（基金のもの）のアダプターが修理不可能ということが分かったので、韓国製を買う。その他、文房具などを買って揃えた。

7月30日(休)総領事が見える。昼食に同席。

8月1日(出)三原氏、センターでの教え子から招待を受け光州へ。筆者と生越氏便乗。帰りの最終バスに危うくセーフ。

8月2日(日)昨日来電話が不通であることが分かる。昨日この件で成澤氏とホテル側との間に激しい応酬があったらしい。成澤氏は電話確保のため部屋を変ったとのこと。筆者の部屋の電話は4日まで不通だった。原因は日本製の電話交換機のIC。フロントマン氏いわく、日本製は脆弱である。

この日、科の先生がたの誘いで双溪寺(智異山の麓)、南海方面へドライブ。昼食に鮎料理をご馳走になる。ただ、筆者は刺身は遠慮した。釣りが趣味の成澤氏、水槽の鮎を見て「こいつは養殖じゃない」と感激。ホテルでお返しを張る。

8月6日(休)智異山へ1日バス旅行。例によってバスの中は盛り上がる。運転手に職業を間違えたのじゃないかと言わしめるほどの歌上手もいた。筆者も2曲歌った。この日は曇天だったが、智異山老姑壇山頂で流れるガスをバックに飲む焼酎の喉ごしは爽快だった。

8月7日(金)「ヤンさんと日本人々続編」の海賊版横行。前前日業者が売りにきたらしい。授業に支障をきたす。スピーチ原稿回収して添削。

8月11日(火)試験問題、実施マニュアルできる。成澤氏が作成。助教とアルバイトの学生を夕食に誘う。

8月12日(水)テスト。一昨年も昨年もそうだが、外国人である我々が研修生のこれらかの人生を左右するようなことに関与していいのか、「会話」をどう評価するのかというような問題のため、渡韓前に慶尚大学に実施を取りやめたいと申し入れたが了解を得ず。授業するのだから評価するのも当然である、ということ。分かっているが煮えきらない我々。文化の違いか。さて、実際渡韓して科の先生がたと話をしてみると、成績はつけなければならぬが、他の教科との競争があるのでその辺を直しくとのこと(メンタリティとしては近いものを感じる一例である)。ではどの程度にすればいいかと尋ねたところ、××(筆者の判断でオフレコにする)×××であった。次の問題は「会話」の評価であるが、うまく評価できたとしてもこれは現実問題として授業の評価ではなく、本人の実際の会話能力の評価でしか有り得ないというのが我々4人の一致した意見であった。やむを得まい。ある一定の範囲の中で試験官が話題を一つ選んで受験生と対話をするという形式の試験を実施した。

昼食は科の先生がたの招待で犬料理。この日、もう使用しない機材は箱に入れ帰国準備

に取り掛かった。

8月13日(木)スピーチ。事前に研修生に「私と日本語」、「私の古里」、「日本に望むこと」の3つのテーマのうち1つ選んで1000字程度のスピーチ原稿を作らせ、我々がそれを添削、練習しておくようにと返却しておいた。どのクラスでも研修生が選んだテーマは最初の二つが圧倒的に多かったが、「日本に望むこと」をテーマに選んだ研修生も若干いた。筆者の担当のクラスでは、「私と日本語」というテーマで「克日」のため日本語を勉強していると言った研修生や、自分の研究成果を発表した研修生がいておもしろかった。最初は文集の製作も考えたが時間的な余裕がなかったので止めた。

このスピーチの原稿作りはいい作文の練習になったと研修生から評価を得た。作文らしい作文の練習はこれだけだったのもっとこまめにやって欲しいという意見もあった。なお、試験とスピーチ合計250点満点であった。

この日、釜山の日本領事館の多田、朴両氏が来て、そこから貸し出した機材をチェック、ホテルにおいているものを除いてすべて梱包完了。夕方、他の3氏は彼らと食事。筆者は元教員研修留学生がなんと江原道からやって来るというのでそれをキャンセル。また、研修生からの全ての誘いも断わって待っていたが、ホテルのフロントが筆者も外出したと勘違いしたか、結局彼に会えたのは11時近くだった。大いに飲む。彼も今や教務主任だそうである。ホテルに戻ったのは2時(?)頃。

8月14日(金)霞のかかった頭で身支度の後研修修了式に出席。やたら喉が乾いた。たてと磁器と辞書をもろう。しばらくしてやや元気回復。午後、雨が本格的になる。成績簿を渡して、梱包した荷物をトラックに詰め込み、ホテルへ立ち寄り残りの荷物も積み込んで晋州市を離れ釜山へ。

釜山到着後ホテル—最初と同じホテル—にチェックインして総領事の公邸で夕食会。この間多田氏が手荷物を日本へ郵送する手配をしてくれた。その後領事館で多田、朴両氏とともにこれまで購入した物品の領収書と現地業務費—来韓した当日領事館で受領した—の残高を照合。他の3氏はホテルへ直行し、筆者らを待つ飲みに行く約束をした。10時半頃雨の中ぐしょぐしょになってホテルに着く。しばらくホテルのレストランで飲んだ後カラオケに行こうということになり、雨の中をふらふらと歩き回ったが、深夜のため見つからずホテルに帰った。

ともあれ、すべて無事終了した。安主任、梁研修院長をはじめ慶尚大学日本語教育科の先生がたや日本領事館の多田、朴両氏には本当にお世話になった。感謝感謝。

8月15日(土)金海空港より離韓。多田氏がホテルのロビーまで見送りにきてくれた。無事日本へ—もっとも成田着だったのだが。